

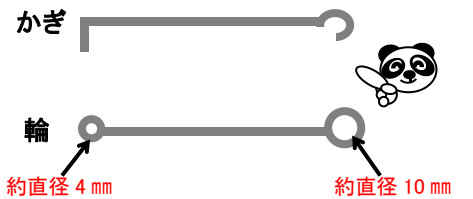
立体視の検査-輪とおし法:足立式



目的

- ・実用的両眼立体視の有無をみる定性検査
- ・両眼視の獲得・強化・術後の輻湊訓練

準備物 針金のかぎ・輪(色は特定なし)



山本裕子:斜視・弱視の診断検査法第2版
P107 図 67

検者と被検者が相対して座位し、
それぞれ検者は小さい方の輪を
被検者はかぎを持つ

直径 4 mmが眼前 30cm
で可能なら視差 10'

検者は被検者の正面に輪の面を垂直
にして(立てて)差し出し、被検者に両
眼開放のままでかぎを輪の真横から中
に通すように指示する

眼前 20~40cmの色々な
距離で5~6回行なう

横から覗き込ませない
ように注意!

片眼でも同様に繰
り返す

例)
うまく通せない!
うまく出来ない時は、
直径 10 mmを用いる。
(以前は 10 mmと 20 mm)

色々な距離で確実に通す
ことが出来た!

結果・記載例)

両眼(-)
片眼(-)

両眼(+)
片眼(+)

両眼(-)
片眼(+)

両眼(+)
片眼(-)

自分の結果を書いておこう!

手先の稚拙さもあるの
で、出来る、出来ないに
拘らず、明らかに両眼と
片眼で差があれば、パン
ダは、ほぼ立体視(+)と
考えて良いと思う。

両眼と単眼に差がない
場合、単眼で出来上が
っている経験的なもの
であると考えるべきで
しょう。

この場合、両眼では輻
湊不全などにより複視
があり(-)、単眼では経
験的なもので(+)となっ
た考えるべきでしょう。

判定不能

大まかな立体視(-)

大まかな立体視(+)

直径 10 mmでも判定
は同じ。

長所

- ・視力不良でも、大まかな実用的立体視が測定できる。
- ・手と眼の連合運動であり、2~3歳位から可能。(距離感の手と共に発達するので融像を引き起こし易い)

短所

- ・両眼視がなくとも、片眼でも出来る場合がある。(単眼で距離感が出来ている場合)
- ・微小角斜視で(+)になる。(この程度の立体視は持っている)
- ・かなり大きな斜視角でも(+)のことがある。

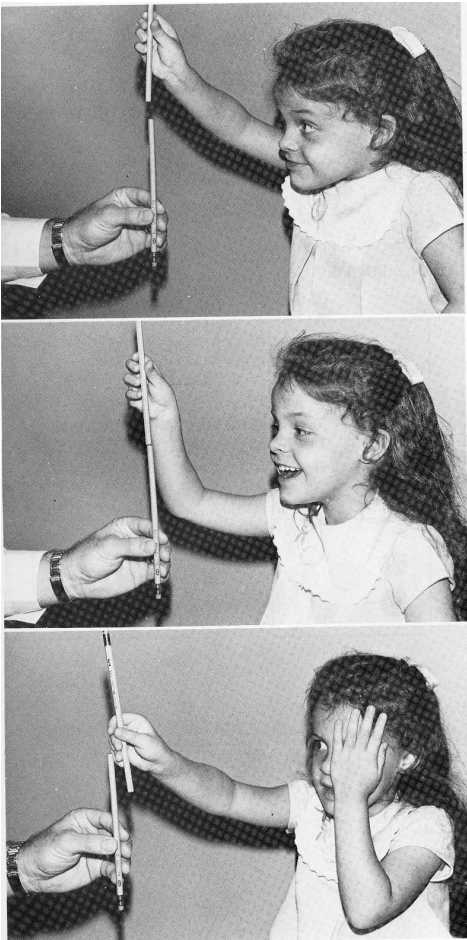
立体視の検査(two-pencil法)



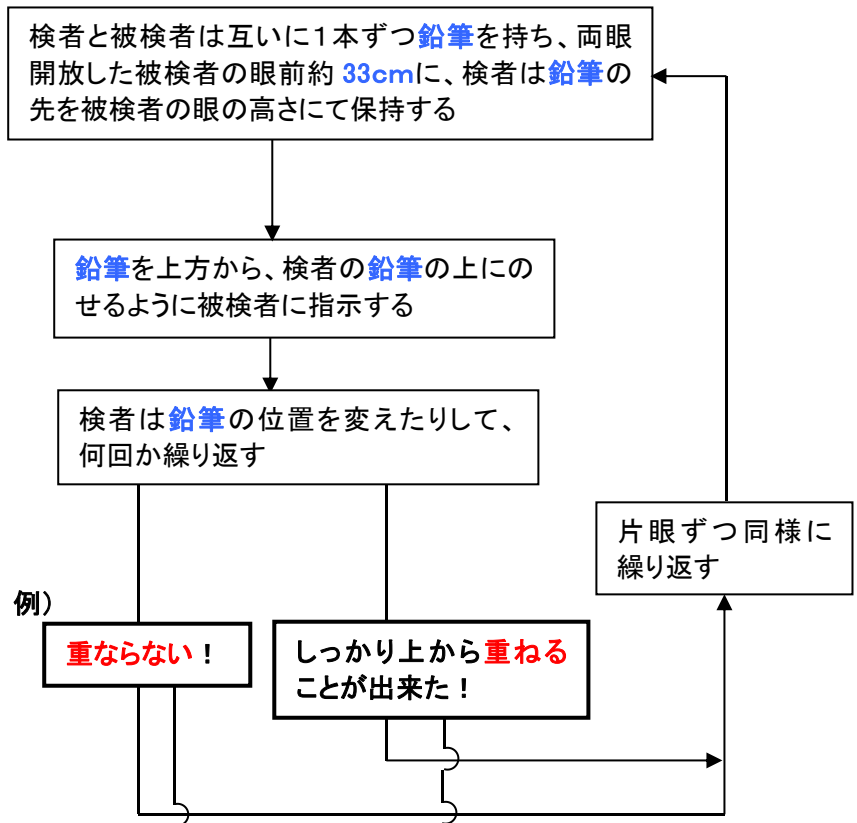
目的

日常の大よその立体視の有無をみる定性検査
アトラス斜視 (立体視 約 1,000~3,000")
眼科検査ガイド(立体視 約 3,000~5,000")

準備物 長さ17cm位の鉛筆2本



アトラス斜視 P69 図46より



結果・記載例)



両眼(-)
片眼(-)

両眼(+)
片眼(+)

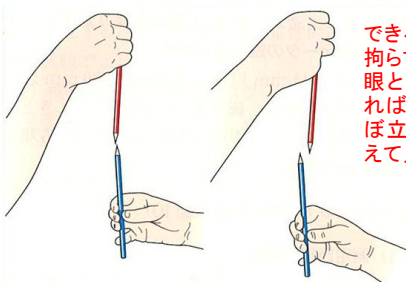
両眼(+)
片眼(-)



自分の結果を書いておこう！

判定不能

1000~3000" 程度の立体視(+)



できる、できないに拘らず、明らかに両眼と片眼で差があれば、バンダは、ほぼ立体視(+)と考えて良いと思う。

眼科検査ガイド P357

これは鉛筆の芯の方となっている



長所

特別な装置なしで、大よその日常での立体視が判る。



補足

大人の眼筋麻痺症例に対してさしこし検査(定位の誤認)としても使用できる。